

二〇二六年五月二日

松原へ通ふ風あり浜涼し  
庭隅に日の斑の躍る若葉影  
湖風に呼応し揺るる藤の花  
緑濃き山裾の墓碑訪ねけり  
菩提寺を統べて高々桐の花  
朱の門へ続く参道風光る  
臥す吾に元氣だせよと囁れる  
墳丘今絮たんぼぼの終着地  
放牧の馬の背に映ゆ新樹光

二〇二六年五月一日

聖五月嬰の瞳に母の顔  
昭和のデゴイチ園のモニメント  
一刷けの彩雲纏ひ月涼し  
映されて水面に触るる藤の房

二〇二六年四月三〇日

生垣は燃ゆる躑躅や療養所  
めまとひを払ひつ潜る鳥居かな

二〇二六年四月二九日

雨ごとに畑の玉ねぎ太りゆく  
人住まぬ家に遺愛の薔薇の門  
海望む展望台に初音聞く  
万緑の中や幾重も丹の鳥居  
片陰へ寄りて媪ら老い談義

花茗荷

澄子

よし女

むべ

こずもす

風民

康子

やよい

愛正

そうけい

やよい

むべ

澄子

むべ

やよい

千鶴

むべ

山椒

やよい

うつぎ

二〇二六年四月二八日

ハミングのもれ来るバラの待合室  
過疎村に威風堂々の鯉幟  
昭和の日深夜ラヂオはテレサテン

二〇二六年四月二七日

若葉して比叡のお山膨らみぬ  
新緑のグラデーションや杉美林  
春昼やカフェに集ひし見守り隊  
竹伸びてもろ肌脱ぎに皮残す  
疲れ見ゆ葦簣の影の大牡丹  
睡蓮の幼葉池におしくらす

二〇二六年四月二六日

隠沼の泥神楽すは蝌蚪の国  
大いなる碑のたつ楠若葉  
冷やし蕎麦うまし白磁の皿重ね  
緑立つ松を侍らせ辰鼓楼

あひる

うつぎ

もとこ

もとこ

うつぎ

康子

むべ

きよえ

あひる

あひる

康子

やよい

うつぎ

うつぎ

毎日句会みのる選・二〇二六年五月四日